
Short story 3

伶俐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Short story 3

【Nコード】

N9133N

【作者名】

伶俐

【あらすじ】

入社5年目の先輩、須藤亜里沙。入社3年目の後輩、御堂謙一。閑散としたオフィスで締め切りの迫る仕事に追われる御堂と、それを見守る彼女。ほんの少し、変化の予感。

こつり、と彼の事務机の上に白いマグカップを置いた。

事務机の上はパソコンと、一面の書類に埋め尽くされている。マグカップが置かれたのは彼の目の前の、本当にマグカップ分の面積の空き地だった。

きつと彼は実際にマグカップを置いていたんだろう。何度ここに飲み物を置いたんだろう。

「どう、終わりそう？」

声を掛けて、自分は立ったまま隣のデスクに寄りかかって彼を見た。

「あ、須藤さんすいません、ありがとうございます。」

彼はマグカップに気づき、入職時から変わらない、律儀に頭を下げながら礼を言った。

けれどその顔はすいぶん疲労の色が濃い。ここ数日彼は納期の厳しい仕事を抱えていて、その段取りや書類の作成に追われている。

時間は22時。オフィスの明かりは煌々としているが、フロアにはわたしたち二人以外の姿はない。

「なんとか明日の朝には間に合うと思うんですけど。っていうか間に合わせないといけないですね。」

そう彼が呟く声は、ちょっと弱弱しかった。

彼、御堂謙一は2つ下の後輩で現在入社3年目。入社時は周りに押されぎみで頼りない感じが強く、大丈夫だろうかと課の全員が思っていたことだろう。しかし彼は怒られたことをひとつひとつ訂正してもう一度間違えないようにする、という努力を何度も重ねることによって急成長した。今ではすいぶん彼も頼りにされるようになり、少しずつではあるがひとりで案件を任されるようになっていく。ただ、その分プレッシャーも大きいらしく、こここのころの仕事量の多さと納期の締め切りで、すいぶん参っているように見える。忙しすぎてそれらが解消されないままずっと根詰めて仕事をしており、

一応先輩としては気になっていた。

「御堂くん、夕ご飯は何か食べたの？」

「あー、何かその辺にあったものを食べたような気がします。」

「その様子じゃ食べてなさそうだね。じゃあコーヒーはやめとこう。胃が荒れる。」

そう言っただけでわたしは自分が置いたマグカップを取るために手を伸ばした。

「あつ、いえ、いいんです。飲みますから！せつかく先輩が入れてくださったのに。」

慌てて彼が、マグカップに伸びたわたしの手を遮った。

彼の手がわたしの手首をつかんで、びくり、とする。

少し自分より高い体温にときどきしながら、それを顔に出さないように気をつけた。

「だめだよ。代わりに違う飲み物入れてくるからちよつと待ってて。」

するり、と彼の腕をすり抜けてマグカップをさらい、給湯室へ向かった。

ちゃんと食べてないみたいだから、何がいいだろう。

これから仕事をするだろうから消化にいいものがないだろう。

そう考えて、食べ物を買おうと思ひ立ち、会社の真ん前にあるコンビニエンスストアに入った。

若いから揚げ物が入った弁当でも食べられちゃうだろうけど、健康にはよくない。レトルトの棚に目をやると、お粥やスープが目にとまる。これなら食べやすいだろうが、もしかしたら物足りないかもしれない。

そんな風に考えている自分がなんだか彼の母親のようで、くすりと笑った。

彼に恋人がいたらちゃんと彼の健康を気遣って料理を作ってくれるだろう。もしかして今も家で料理を作っただけ彼の帰りを待っていたり

するんだろつか。その場合、今の自分の行動は余計なおせっかいになっちゃダメだよ……

まあ、彼が食べないと言えは自分が食べればいいのだし、と気持ち切り替えて、わたしは目に付いたものを全部力ゴの中へと入れていった。

「先輩！」

彼の声が聞こえたのはコンビニで買い物を済ませ会社のロビーへ入った時だった。

「どうしたの？何かあった？すごい息切れてるけど。」

現れた彼は息が荒く、少しネクタイも曲がっていてそれこそ慌てている様子だった。

「どうしたの、じゃないですよ。給湯室行っただけ戻ってこないから心配したんですって。」

そういえば彼には飲み物を入れなす、としか言っていないんだっただ。腕時計に目を遣るとあれから30分以上経過している。

「ごめんね、心配かけちゃったね。ちょっと買い物してたら楽しくなっちゃって。」

「買い物？」

「そう。食べ物買って来たから一緒に食べようよ。」

「えっ、先輩が買って来てくれたんですか。」

「わたしがおなかすいちゃったから御堂くんも巻き込もうと思ってひとりで食べるより楽しいでしょ。」

そう言うとは彼は眉を下げて、申し訳ないような、なんともいえないというような顔をした。

「ええーっと、おにぎりでしょ、サンドイッチ、おかゆ、味噌汁、コーンスープ、ポテトサラダ、たこ焼き、フランクフルト、栄養ドリンク、プリン……、ってただだけあるんですか。」

オフィスに戻ってきて袋の中身を見た彼はあきれたような声を出した。

予想通りの反応がおかしくて、笑いながら答える。

「久々にコンビ二行っただけど、最近のコンビ二ってすごいね。なんかおいしそうなものいっぱいあるからさ、目移りしちゃって。」

こんなになくさんの食べ物を買ったのはもちろん楽しかったのもあるが、半分は彼がどのくらい、何を食べられるかわからなかったからだ。これだけ種類があれば何かひとつくらい彼の食べられるものがあるだろう、と思ったから。

「今度こそ飲み物入れてくるから、その間に食べ物決めといてね。」

「いや、俺が飲み物入れてきますから、」

「うっん、わたし優柔不断だからさ、決めてくれたほうが嬉しいんだ。だからよろしく。」

彼が席を立とうとしたのを制して、先に給湯室へと歩いていった。

給湯室は狭いが一口のガスコンロもあるのでお湯もわかせて簡単な調理もできる。お茶とコーヒーは課のみんなで費用を出し合って購入しているが、時折違うものが飲みたいときは自分で買って持ってきている。ハーブティーもそのうちのひとつで、ティーバックから取り出して、真っ白の飾り気のないカップに入れ、湯を注ぐ。

蒸らして少し待つ間に考える。ハーブティーで少しは落ち着くだろうか、と。

頭の中が彼のことばかりだということに苦笑した。

- 思ったより気になってるんだな。

いい香りが立ち上るカップを2客お盆にのせて、彼の元へ戻った。

自分のデスクで食べると大事な書類が汚れる可能性があるので、休憩室に行って食べることにした。

心配したよりも御堂は食欲があるようで、話をしながらぱくぱくと平らげていく。

「たまにはこういうのも面白いよね。」

ポテトサラダをきれいに食べ終わった御堂を見ながら声をかける。

「ていうか、先輩とご飯一緒にするのって初めてじゃないですか？」

「ほら、先輩って呼ばなくていいよ。」

「いや、でも、俺にとってはいつまでも須藤さんは先輩なんですよ。」

職場の中では先輩とは呼ばずにさんづけで呼ぶように。それは彼が新人のころから言っていることなんだけど、ときどき彼はわたしを先輩、と呼ぶ。それはなんだか青春時代のように、くすぐったい響きだ。

「そういえば、ご飯は一緒に食べに行ったことないよね。」

「あんまり昼だって帰りだって一緒にならないですよ。先輩、俺のこと避けてます？」

ちよつとふざけた口調で、彼が言う。

「そんなことあるわけないでしょ。御堂くんがわたしを避けてるんだって。」

「それは絶対にありません。」

断定口調で言い切った彼がおかしくて、くすぐすと笑った。

「じゃあ、この仕事終わったらご飯食べに行く？」

「えっ、あつ、行きます行きます。絶対ですよ。」

ちよつと身を乗り出した彼は、なんだか尻尾を振っている犬のようで、それがまたおかしくてくすぐす笑った。

「俺、ちゃんと覚えてますからね。取り消しなしですよ。」

「取り消さないよ。楽しみにしてるから。」

そう言っと、彼の顔が笑顔になった。

「俺も楽しみです。よーし、なんかすごいやる気出てきた。」

食事前よりもいくぶん元気になった彼を見て、すごく嬉しくなった。

「1時間、手伝ってから帰る。」

そう提案したのは自分の仕事が終わった24時。当然のように彼はいいです、と拒否する。

「だから、1時間。どうせ御堂くんが担当している取引関係の書類はわからないから、社内提出用の書類を手伝う。1時間やって終わらなくても、それで帰るから。」

「でも、自分の仕事ですから須藤さんにやってもらうわけにはいきません。」

目の下にくまができてるような疲労をたたえた顔でも、彼はしっかりと視線をこちらに合わせて言った。

「御堂くん、時には人を頼りにしたほうがいいよ。確かに自分の仕事かもしれない。でも、これには相手がいることだから。自分でやることにこだわってたら相手を損なうことがあるんだよ。だから、たとえわたしが先輩でも、わたしにできることは割り振って。」

「でも、」

「それともなに、わたしが困っているときは助けてくれない？」
ちよつと意地悪な言い方をすると、慌てたように彼が否定した。

「そんなことないです！」

「じゃあ、同じことだよ。会社では先輩後輩があっても、仕事の内容に上下があるわけじゃないでしょ。どれも大事な仕事だから、時には助け合う、それでいいじゃない。」

うつ、と彼は黙って、考え込むような顔つきになった。

「それにね、感謝してるんだ、御堂くん。」

「・・・えっ？」

「ちょうど2年前くらいにさ、初めて結構大きなプロジェクトに関

わってただけでなかなかうまくいなくて。先輩には怒られっぱなしで自分で情けなくてイライラしたり落ち込んでたりしたんだよね。」

「2年前、ですか。」

「そう。わたしが入社3年目のとき。」

「ちょうど今の御堂と同じような感じだったかもしれない。何もかもうまくいかないし、毎日毎日それで帰りは遅くなるし、どこにも愚痴を言えないし。そんな時に、ミーティングから帰ってくるとミルクティーの缶がこりと自分の机に置かれていた。」

「あれ、御堂くんだったでしょ。すごい嬉しかったんだよ。」

「・・・気づいてたんですか。」

当時御堂は入社1年目の新人。研修時間が終わった後、いつも人より1時間居残りして、勉強して帰っていたのを知っている。あの日もちようど自分のデスクに帰って来た時、ちらりと彼の姿を捉えたのだ。

「ごめんね、ずっとお礼いえなくて。」

お礼を言わないといけないと思っていたのだが、忙しさを言い訳に伸ばし伸ばしになって、ついには言わないままここまでできてしまった。

本当の理由は、彼の人気だった。

少し幼さの残る顔立ちをしているが、彼はいわゆる「見目のいい」容姿をしている。しかし軽い感じがなく礼儀正しい人柄から、爽やかな青年ということとで特にお姉さま方から人気が高かった。最近の仕事の評判も良く、スマートにこなせるようになったことで雰囲気がかぐつと大人っぽくなり、年下からも人気が出るようになったのだ。そついった女の噂は聞き耳を立てなくとも自然に耳に入る。だから彼と話すことでいらぬ誤解や嫉妬をうつけることは避けたかった。

（っていうのもいい訳だな。）

お礼をひとこと言うくらいいけないこと。つまりは自分が彼を意識していたからにすぎない。

「まさか、気づいていたなんて思いませんでした。」

少し照れたように、彼が言った。

「ありがとう。」

「・・・いえ。」

ゆつくりと、彼は横に首を振った。

「じゃ、そろそろ仕事しよっか。」

「はい。」

その後、しびしびと言った感じではあるが、彼はいくつか書類をわたしに割り振った。ぱっと見た感じ、やはりわたしの負担が少ないように配慮して簡単な書類を渡してくれているようだったので、ひとつ余分に勝手に書類を拝借する。

お互いひとこともしゃべらずひたすら、かたかたとキーをたたく音が響くこと、1時間。

25時になったところで切り上げ、わたしは彼に近づいた。

「だいたいできたと思うけど、あとで確認しておいてね。」

「・・・1時間でこんなにやったんですか？って、俺この書類渡してましたっけ。」

やはり気づいたか、と思ったがとぼけておく。

「あつたよ。さすが、ちゃんと1時間で終わる量になってたね。」

彼はちよつと睨むように、じつとこちらを見つめる。

その無言の視線にちよつと怯むけど、そらさないで見つめ返す。

と、ふと彼の視線が緩んだ。

「・・・ありがとうございます。」

彼の切ない表情は、わたしの心をかき乱す。

うつん、と首を振った。

「じゃあ先に帰るから、あと頑張ってね。」

席を立ってかばんを持ち、笑顔を向けた。

一瞬彼がものすごく寂しそうな顔をしたような気がした、が、次の

瞬間には笑顔でこちらを見つめていた。

「今日は本当にありがとうございました。また8時間後に。」

「そっか、8時間後ね。」

「おやすみなさい。」

「じゃ、お先に。」

フロアを後にしたわたしはあらかじめ呼んでおいたタクシーに乗りこんで家に帰り、目覚ましを普段より30分セットしてベッドにもぐりこんだ。

翌朝、眠たい目をこじあけてなんとか起きたわたしはシャワーを浴びた後、いつもより30分早く家を出た。

それは、やはり御堂の様子が気になったからだ。

仕事は間に合ったのか、少しは休めたのか、朝食は食べたんだろうか。

気にしすぎだ、と自分でも思いつけど、気になるんだから仕方ない。

気が急いたからか、始業の1時間前に会社に着いた。

時間は朝8時。

フロアには誰もいない。御堂の姿もない。

鞆を自分のデスクに置くと、メモが一枚置かれていることに気づいた。

『須藤さんへ』

おかげさまで仕事無事に終わりました。

1時間寝る時間もできました。

本当にありがとうございました。

朝7時、御堂』

几帳面な字でつづられているメモを見て顔が緩むのがわかる。

そこで気づく。朝7時から1時間寝る、ということはそろそろ起きるつもりなんだろうか。

とりあえず自分の始業準備をして、彼の様子を見に行くことにする。

ほかの人は30分前になるとちらほら出社してくるから、30分前になっても彼が席に戻ってこなかったら様子を見に行くことにしよう。

その後、自分の始業準備をすませ、気になってちらちらと時計を見ながらデスクについていたが、30分前になっても御堂は戻って来ない。おはようございます、とひとり社員がフロアに上がってきたのを見て、挨拶をしたあと彼女は小さな袋を持ってフロアを出た。休憩室は始業前だと愛煙家のための喫煙所になっていることが多いので、ここにはいないだろうと思いつながら寄ってみたが案の定彼はいなかった。

（だとすると、可能性が高いのは・・・）

小会議室横の、第1資料室。

あそこには小さなソファがあつて、隠れた休憩スペースになっている。

コンコン、とドアをノックする。

扉の前で耳を澄ますが、何も返事はない。

「失礼します。」

一応声をかけてドアを開け、中へ入る。

資料室は5畳ほどの広さの、縦長の部屋だ。資料の詰まったスチールの棚の間をすり抜けて、奥へと向かう。

（いた。）

資料室には似つかわしくない2人がけの革張りのソファに、窮屈そうに体を丸めて眠っている御堂が、そこにいた。

寝顔を見るのも初めてだ。

少し近づいて、寝顔を覗き込む。至近距離で見ると、これは普段なら絶対にできない。

まつげが長い。鼻梁がずっと通っている。

まだ目元のくまは残っている。ひげがうつすらびていて、疲労の色は濃い。

気持ちよさそうに寝ているところを起こすのは忍びないけれど、そ

ろそろ起こさないと始業に間に合わなくなるだろう。

「御堂くん、」

静かな部屋で声を出すのは、思いのほか勇気が要った。大きく響いたような気がしたけど、彼は目を覚ます様子がない。

「御堂くん。」

もう少し大きな声で呼んでみる。規則正しい寝息は続く。

「御堂くん、起きて。」

軽く肩を叩いてみるが、反応なし。

仕方ないので、しゃがんで彼に近づいて、両肩に手をかけた。

「御堂くん、9時になるよ。起きて。」

大きめに肩を揺らす。と、ピクリとまぶたが動いた。

しかしまぶたは開かず、そのまま寝そうになったので思わず両手を彼の頬に当てていた。

「遅刻するよ。」

そのとき、パチリ、と音がしそうな勢いでまぶたが開いた。

驚いて身を引こうとするが、その前に彼の手が頬に置かれていたわたしの手を捕らえた。

まだきちんと目が覚めていないのか、少し焦点が合わないまままぶちはちと难道かまばたきを繰り返す。

その様子を見ながら——正確には彼の瞳から目が離せないまま——一気に心拍数が上がったのを自覚していた。

距離が近い。近すぎる。

彼は手を伸ばして、わたしの頬に触れた。

顔が火照っている気がする。ものすごく赤くなっているんじゃないだろうか。

彼は、寝ぼけているんだろうか。

「……せん、ぱい？」

ぼつり、と眠さが抜けきらない声で彼が呟く。

「起きた？」

「……夢、ですか？」

「なんで？」

どうしてそこで夢になるんだろう？

「だって、目が覚めたら、そこに先輩がいるなんて。」

その表現は激しく誤解を生むよ、と思った。嬉しい解釈をしてしまった。なかなか顔のほてりが引かない。早くちゃんと目覚めてもらわないとこっちの心臓がもたない。

こっちはものすごく動揺しているというのに、彼は全く動揺していない様子がない。

「ごめんね、朝起こしにきたのがほかの女の子じゃなくて。とにかく、そろそろ起きたほうがいいよ。もうだいぶ人が来てる。」

声に動揺が現れないように、必死で落ち着けて言葉を出した。

そう、わたしなんかより起こしてもらうなら綺麗なお姉さんが可愛い子がよかっただろう。

「うっん、亜理紗がいい。」

そう言つて、彼はふわりと身を起こしてわたしを抱きしめた。

（ええっ！？）

瞬時にパニックになる。首筋に少し触れる、のびた彼のひげ。鼻先を掠める、彼の香り。

一瞬だったか数瞬だったかのちにパニックから脱したわたしは、とにかく彼から離れないと、と焦った。

「ほーら、誰かと間違えてないで起きて。朝ごはん用意したけど、食べる？」

「えっ、もしかして、先輩が作ったんですか？」

彼はそう言つてふっとわたしの体から手を離れた。その隙に、彼の手の届かない距離まで離れる。

まだ心臓はバクバク鳴っている。

とにかく気を逸らそうと、持ってきた袋から包みを取り出した。

「おにぎりと玉子焼きくらいだけど、食べる？」

「はい、いただきます。」

彼の顔は満面の笑顔だった。尻尾を振っている犬のような。

さつき抱きしめられたとき、一瞬彼が、まるで捕らえた獲物を逃さないチーターのように感じてしまったのは。

きつと彼が寝起きだったからだろう。

「じゃ、先に行ってるね。」

そういつて、わたしは資料室を後にした。

パタン、と扉を閉じて、呟いた。

「でも、寝起きでわたしの名前を呼ぶのは反則だよ……。」

今日の自分が使い物になるかどうか、自分で甚だ心配だった。

ぱたん、とドアが閉じられた後の資料室では、御堂謙一が彼女の作ったおにぎりを口にしていた。

「亜理紗、」

名前を呼ぶと、愛しくなる。

彼女に想いを寄せて、もう2年になる。

彼女は覚えていないと思う。自分が新人の頃、彼女はよく残業をしていた。休憩のときに飲み物を余分に買っては、居残っている新人に渡したりしていた。そうして時々、わからないところを教えてくれた。自分も忙しいのに。

その優しさや仕事へのひたむきな姿勢に惹かれて、いつか彼女に認められるようになるかと頑張ってきた。

「でもまだまだだな。」

心配かけるなんて。

でも正直、昨夜一緒に残って仕事ができただの時間は天国だった。

そして彼女はわざと面倒な書類をひとつ余分にとって、仕上げてくれていた。そういう優しさに、また心がざわめいた。

そして、朝目覚めたら、彼女がいた。

本当は扉をノックした時点でもう目は覚めていた。けれど、彼女の声を聞いたら起こしてほしいと思って、ちよつといたずら心が芽生えた。

「亜理紗」

そう呼んで抱きしめたのは、本当に愛しくて。我慢できなかった。腕の内に抱いた彼女は少し不安げに固まっていたが、鼻腔をくすぐる彼女の香りは朝から自分の性を十分に自覚させるものだった。

これで少しでも彼女に意識してもらえればいい。

後輩から、ひとりの男として。

「まずは食事、か。」

食事に行く約束ができたことでも一歩前進。

「絶対、近づいてみせますから。」

誰よりも、あなたの近くに。

亜理紗、ともう一度呟いた彼を見た人物がいたなら、やはりチータに例えただろう。

それくらい、御堂は爽やかには程遠い笑みを口元に浮かべていた。

3（後書き）

お読みいただきありがとうございます。
今回は男性が年下ですが、またもや黒い？
獲物を狙ってます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9133n/>

Short story 3

2010年12月7日14時14分発行